

平成18年12月19日
午後6時30分～
第4会議室

第3回 杉並区教育基本条例等に関する懇談会 次第

1 開会

2 資料説明

3 意見交換及び質疑

～「教育基本条例等に、何を重点的に盛り込んでいくのか？」を中心に

4 次回の日程等

5 閉会

<配布資料>

資料 10 第2回杉並区教育基本条例等に関する懇談会 発言要旨

資料 11 「教育基本条例等に、何を重点的に盛り込んでいくのか」

<参考資料>

(裏面に記載)

＜参考資料一覧＞

【杉並区に関する資料】

1	杉並区内居住の3～5歳児の就園状況（16～18年度） ※幼稚園、保育園等
2	杉並区立小・中学校在籍児童・生徒数推移（13～18年度）
3	平成18年度 杉並区行政評価報告書 【例】▶保育園待機児童数(14～18年度) ▶学習内容を理解している児童・生徒の割合(16～17年度) ▶不登校児童生徒数の推移(13～17年度) ▶いじめや仲間はずれがなく生活していると感じている子どもの割合 ▶区民一人あたりの文化的な生活時間（13～17年度）▶ボランティアに参加したことがある区民の割合（13～17年度）▶高齢者で生きがいを感じている人の割合(13～17年度) 等
4	平成15年度杉並区青少年実態調査報告書(ダイジェスト版) ※5年に1度の調査 ▶子育ての感想 ▶不安・悩み ▶学校教育への要望 ▶身近な地域の居場所 ▶親子の規範意識 ▶朝食・喫煙・飲酒等の状況 ▶学校への感想 ▶いじめの有無 ▶ボランティアへの参加意向 等
5	学習・生活についてのアンケート調査 (17年度杉並区立小・中学校学力調査、意識・実態調査結果報告書より抜粋) ＜調査項目＞▶学習時間 ▶読書冊数 ▶学力調査と読書冊数のクロス集計 ▶自己の安定感 ▶学力向上のベース ▶学力向上への態度
6	杉並区の学校サポーター等活動実績推移（14～17年度）
7	すぎなみ地域大学実施状況（18年度）
8	平成17年度主要施策の成果（杉並区） 【例】(教育分野)▶児童等の安全確保 ▶学力・体力の向上 ▶小中一貫教育の推進 ▶地域運営学校の推進 ▶地域との協働 ▶図書館サービスの充実 ▶杉並師範館 など
9	杉並の教育を考える懇談会提言書（平成13年3月） ※区ホームページにも掲載。
10	「第38回杉並区区民意向調査(平成18年10月)」より、「地域ぐるみで教育立区」についての頁を抜粋したもの。 ※速報版は第1回懇談会で配布。
11	教育報 No.183

【国、東京都の資料】

12	東京の教育に関する都民意識調査【報告書(概要版)】平成15年（東京都教育庁） ▶子どもの現状 ▶家庭・学校・地域等の現状
13	「子どもの基本的な生活習慣」（文科省生涯学習政策局「早寝早起き朝ごはん」国民運動プロジェクトチーム） ▶就学前の幼児における就寝時間 ▶朝ごはんを食べないことがある小中学生 ▶毎日朝食をとる子ほど、ペーパーテストの得点が高い傾向 ▶お手伝いをする子ほど道徳観・正義感が身についている傾向

【その他の資料】

14	第3回幼児の生活アンケート ～乳幼児を持つ保護者を対象に～ 国内調査・速報版 (ベネッセ教育研究開発センター) ※同センターホームページに掲載。
----	---

第2回 杉並区教育基本条例等に関する懇談会発言要旨 (H18.11.20)

事務局次長

区の基本計画の中で、「人が生きる」をキーワードに「教育立区」という言葉が出た。その後、「教育ビジョン」作成の際「策定の趣旨」のキーワードを「3つの危機」として考えた。一つ目が「地域や家庭の危機」で、少子化、希薄な地域意識、しつけ、公共心、児童虐待の問題。二つ目が「学校の危機」で、新しい教育政策への対応を学校でどう実践していくか、学校への保護者等の過剰な期待、不信感など学校の安全神話の崩壊による安全管理の問題。三つ目は「子どもたちの危機」で、子どもたちの病理的現象として、保護し過ぎ家族、子ども中心の家族、大人になりたくない症候群、与えられることに慣れてしまった子どもたち、良い子であり続けることに疲れてしまった子どもたち。なぜ学ぶのか、なぜ生きるのか、学びの目的の喪失が子どもたちの中に生まれている。

こうした課題は、行政だけでは解決できないので、全ての施策を「人づくり」という視点で見直し、全体で取り組むことが必要ということを「教育ビジョン」の中にうたった。

平成16年6月に教育委員会だけでは対応し切れない問題に区を挙げて取り組むため、助役を本部長、教育長を副本部長とする教育立区推進本部を立ち上げ検討してきた。

この教育立区推進本部の中では、連携特定課題の推進として、それぞれの分野で何をどうしていくか、「人づくり」をキーワードに縦割りの部分を補い5つのプロジェクトを立ち上げた。

一つ目が、地域貢献プロジェクト。これまで、社会教育の範疇で自分たちが勉強する、という考え方が強かったが、もう少し地域という視点で見て、地域がどう貢献できるのか、という視点で改めて社会教育的なものを考えていくために立ち上げた。

二つ目が、就学前教育プロジェクト。0歳から入学前までをどのように進めていくのか、幼児教育の時点で、人間形成の基礎の場面でどう進めていくかという考えにより立ち上げた。

三つ目が、学校力向上プロジェクト。学校は学校だけで成り立っているのではなく、地域との関係、学校が本来持っている力、教育委員会で支援していかなければいけない力、それらを総合して学校力という位置づけをしてどう高めていけるのか、という視点で立ち上げた。

四つ目は、食育推進プロジェクト。大事なポイントは、食を、単に栄養面の話だけでなく、人間が育っていくために人間関係、親子関係も含めた点から食育をとらえ直していく必要があるのではないかと立ち上げた。

五つ目は、道徳推進プロジェクト。区で「道徳読本」をつくったが、どう普及させていくかと立ち上げた。

平成17年11月に各プロジェクトを終え、教育立区推進本部に報告したが、食育推進プロジェクトと就学前教育プロジェクトについては、食育推進委員会と就学前教育推進委員会として継続させ、本年8月に途中の報告を出し、これから最後の詰めに入る。

教育基本条例等の制定のための検討も、この教育立区推進本部の中に位置づけられており、懇談会の報告を受け、教育立区推進本部の中でどういう形で打ち出していくのか議論しながら進めていく。

会長

「人づくり」が杉並区の1つの大きなポイントで、そのことが基本条例等にどう盛り込まれるか。地域ぐるみで教育の問題を考えていこうと。地域の教育力をどう高めるか、連携、協働(コラボレーション)。領域的には、学校教育と家庭教育と社会教育、就学前教育という問題もあるが、杉並らしい教育のあり方を考えていく。

条例云々に話が集約しているが、決着をつけるより、中身の議論をする中から形が見えてきたらいい。

現状分析や対策の方針は出ているのに実施していないのか、実施しているのに実効性がないのか。教育改革というのは、いつも大変だという議論ばかりだが、いろいろな施策が実施されていないというよりは効果が出てこない。次々に新しい状況が出てくるので対策が後追いになっているということもある。

教育と学習をきちっと仕分けをしたほうがいい。場の問題、学校・家庭・地域、あるいは就学前・就学中・就学後といろいろなレベル分けができる。

教育は、区、教育委員会、学校・社会教育の現場で、また、地域、家庭などのさまざまな協力により、公的にも私的にもやっており、それらを踏まえながら、条例等をつくるときに、どこを重点的に盛り込んだらいいのか、今後の見通しを踏まえて議論する。

教育長の発言にある「地域分権」という言葉は、一般に「地方分権」と言われている言葉と明らかに違う杉並的な個性である。学校力向上プロジェクトの報告の中でも「区立学校から地域立学校へ」という方針が出されており、杉並が他の自治体と違って重点的に進めている杉並らしい施策である。

杉並に住んで、活動、仕事をしている人がベースだが、住んでいるが職場は区外、住んでいないが杉並で仕事、活動をしているなど、何らかの形で杉並に関わっている人たちが、教育を中心として充実した時間が持てるよう整備が必要である。

個人と同時に、会社、店、組織も法人という「人」であるので、杉並区の中で行われる様々な活動に主体的に関わって、そこから何らかの充実感が得られるといいが、レベルの高いことを目指すので、初めは、義務化されてやることになるが、継続、充実していくためには、皆がやってよかったと感じられることが大切。

これからの子どもたちの教育を考えたときに、今まではそれほど必要ではなかったが本当はあった方がよいもの、あるいは作った方がよいものも考えなければならない。

いろいろな人たちが助け合い、協力し合いながら、杉並で暮らすこと、生きていくこと、縁があって杉並に関わって良かったと思えるようになってほしい。ワンランク上の教育や学習、生活ができる居心地のいいまちとなるよう、知恵を出し合いたい。

副会長

条例等は、区民の皆が「自分たちが何とかしなくてはならない」と立ち上げられるようなボトムアップ式が良いが、条例だとそれはできにくいので、憲章みたいなものになる。

「理念」から入って「行動目標」まで検討し、私たち大人が子どもたちのためにどういう惜しまない支援ができるのか、1人ひとりの区民、学校、家庭が、というところを検討する流れになる。

「教育に支援を惜しまない」とは、どこの分野までの教育の範疇を言っているのか、また、地域とはどこの範囲までの地域を言っているのか、きちんと定義した上で語らなければならない。

区民意向調査によると、「現在、地域で、次に挙げるような活動に参加していますか」という問いでは、9割以上の大人が参加していない。この参加していない9割をどうやって底上げし地域ぐるみで子どもたちを育てるか、啓発を図っていくかが大きな課題。また、「今後参加してみたいと思いますか」という問いに対し、「特にない」が57%もある。あまり関心を持たない大人をどのように、子どもを育てるために発奮させるか、支援を惜しまない人になってくれるかというものを発信できたらと思う。

委員

条例にするかどうかは、もう少し議論を経てからでいいのではないかという話に賛成である。

杉並という地域と学校との関係、学校外教育という部分で杉並らしい特徴を出し、それを学校教育にも反映させると考えると、杉並の地域教育力をどう高めていくのかが基本的な命題となる。

人が生きていくということにおいては、教育とは言いながらも、杉並の地域づくりやまちづくりと一体になりながら進めていくことで、杉並らしい特徴が出てくる。そういう中で、杉並を愛する心、杉並に思いを致すというものがはぐくまれていく。

杉並のコミュニティを考えた場合に、地縁的なつながりとは別に、NPO等、テーマで集まっている区民以外の人たちも関わりを持っているので、区民以外の人も取り込んでいく必要がある。

何か活動するときに責任などかなり重いものを伴う場合、重いだけではみんな長続きしないので、その中に楽しさがあるという仕掛けをつくっていくことが大事である。

日本に来ている留学生に中学校に行き授業をしてもらった際、「役に立つ経験をすることは、すごく幸せで、負担は忘れてしまう」と言われた。役に立つ喜びをうまく組み込んでいけば、地域活動へ参加していない90%の人々も減っていくので、そういう仕掛けをつくっていくことが大事である。

委員

教育というと学校が頭に浮かぶが、学校だけではなく、保育園、幼稚園から始まりいろいろな問題があるので、そこを整理し、大人のやっていることは子どもにどのように影響しているのか、大人育てと子ども育ての両方を一緒に考えていければ良い。

家庭が子どもを育てていく一番の基本になればならず、家庭の力を地域がサポートしていくために、まちの中に昔のような人と人とのつながりが必要。

地域を作っているものは、家庭、学校、会社、その他の組織などいろいろなものがあるが、それらが一体になり、1つの方向に向かって進める仕組みができると良い。

受験に関わる問題が子育ての中で大きいウエートを占めており、子どもが抱えている問題の大半に影響を与えている。

中学生が何かの形で地域の活動に参加し、そういう場がたくさんあると小学生を巻き込み、幼稚園、保育園の子どももそういう仲間に入れていける。

昔、地域で子どもが遊んでいる姿は、同年齢ではなく異年齢だったが、今は同年代でも組めなくなってきた。

委員

「条例」は、ある程度のミッションがあり、それを実現していく方向で具体化を図るために、ある程度の議論をしてそれをもとに施策、方向づけをしていくのが話の中心となる。

「憲章」、「声明」は、集った方々が杉並の教育をどう考えていくのかを最大公約数的に出し合い、ある程度の問題認識、将来像が合意形成されるまでが着地点であり、そこからは先はそれぞれの部門なりパートで議論が巻き起こるように仕掛けていくことである。

この懇談会が「条例」という方向を着地点に考えるのか、「憲章」など話題提起とするのかで議論の方向が違ってくる。

大人がどうするのかということところは、地域貢献というプロジェクト絡みでは関わるかもしれないが、議論を深めるべきなのかどうかはわからない。

もともと教育は大人から子どもに伝えていく世代間の継承であり、生活や労働の中に溶け込んでいた。学校の登場により生活と労働が分離し、通勤が始まると、地域は寝に帰る所で生活する所ではない人や、そこに働きには行っているが住んでいるわけではないという人が増えてきた。そういう中で、教育が殊さら何かをしなくてはという話になるのは、学校が社会的上昇をしていく1つのツールとして成立しているからである。

今の社会の状況では、地縁、血縁といった形で教育を行っていないことを前提にした上で、やはり地縁で行うのだというように無理をするのも1つの方略である。

お祭り、踊りなどは、昔は労働とつながっていたが、今はシーズンになると面白いからやっている、よくわからないがおもしろいという感じの仕掛けもあり得る。

大人の教育、あり方としては、学習、教育を経験することが目的なので、何かのための教育ではなく、それ自身がおもしろい、楽しいということをどう含めていくかが課題。

委員

高円寺は阿波踊り、阿佐ヶ谷はジャズ、荻窪はクラシックという中で地域はまとまっているが、住宅地ではリーダーシップを取れるキーパーソンがいない。キーパーソンをいかに養成していくかということも1つの大きな要素である。役に立って喜ぶ方々や、やってみたら大変喜んでくれる方々は多いので、引き込んでいくチャンスをつくることと、出てきた人たちに継続してやってもらうための手だてが必要。教育の問題では、何かいろいろなことをやっていくにあたり、キーパーソンをどのように作り上げていくかということが一番大事なこと。

委員

PTAに関わる前は、地域活動に参加していない90%の一人だったが、関わってみると勉強になることもたくさんあり、皆様と知り合いになれる。そういうきっかけづくりで90%の人が減っていくのではないかと。

PTA活動も90%の人たちが傍観者で、10%の人たちで賄っているのが現状。地域も学校も同じ。少子化で、共働きの家庭も多く、区外で仕事をしていると、PTA活動を行うのは大変だが、会社や社会が地域貢献活動に目を向け、参加できるような環境を整えることも必要。条例化に際し、地域貢献活動にどんどん人が関わられるような仕組みを作っていければと思っている。

中学校では、学校によって取り組み方はさまざまだが、地域の方々と一緒に子どもたちのために活動を行っているが、活動している人は同じ方が多く、負担になっているので、他の方々を

引き出す仕組みをつくり、成功事例をたくさんつくれば、「地域ぐるみで教育立区」がうまくいくのではないか。

委員

教育の問題は多岐にわたっているので、懇談会で議論すべき定義、範囲を整理していかないと、空しい議論になってしまう。

「条例」にするのか、「憲章」にするのかは、議論を行っていく中で落ちつくべきところが出てくるので、あまり先に結論を出すのは得策ではない。

「条例」と「憲章」では趣きが違ってくるが、教育基本条例は、通常の条例とは違い、罰則規定があるようなものではないと思うので、「憲章」に比較的近い形になる。

「憲章」とか「条例」といった問題に議論が集中すると、具体的な内容になかなか入っていかない。

地縁は重要だが、マイナスになっていることもある。地縁で固まっている地域に新しく来た人は入りにくいので、今後オープンにしていかなければいけない。

活動は、百人や千人など小さい単位であればうまくいっている場合も、1万人規模、杉並区であれば50万人になってくると、いろいろな人のニーズが出るとともに、逆に活動したい人の欲求も多様化しアンマッチが起きてくる。少し手を加えればマッチする可能性があるのではないか。

地縁の中にNPOなどが入ることによりうまくいくこともあるが、入ることにより既存の組織とあつれきが起きることもあり、どのような形で解決するのが大きな問題。

今、学校の教育の中では、学力とは何かということが問われている。学力とは、1つは勉強をする力、それともう1つは学ぶ力、生きる力と言われている。学ぶ力、生きる力が、抜け落ちてしまった「生活をしていくための力」なのだということがよくわかった。

委員

「条例」とするのか、「憲章」、「宣言」とするのか、まずはっきりさせたいのではないか。

「五つ星プラン」、「教育ビジョン推進計画」、「子ども・子育て行動計画」、「教育立区推進本部」、「21世紀ビジョン」などの中で、教育に関する問題点、課題が洗い出されている。その中で、行動計画を立てて動いているが、何をしなければいけないということは述べられているが、実際にどういう形で進めていくのかは具体的ではない。

「憲章」とか「宣言」よりも、「条例」を掲げて進めていくべきではないか。「条例」にすれば、しなければならないのだということを、もう少し強い信念のもとに進められる。

平成13年に「杉並の教育を考える懇談会提言書」が出されているが、この中でかなりのものが提言されており、これ以外に課題として取り上げるものはあまりない。

こうしなければならないということを、上からの押しつけでなく、この場で組み立てて提言したらいいのではないか。

「地域ぐるみの教育立区」の「地域」があいまいなので、はっきりさせる必要がある。

地域活動では必ずキーパーソンが必要で、核になる人がいないと何も起こらない。それをどうやって見つけ、育てるのか、掘り起こすのが必須条件なので、キーパーソンの必要性も条例の中にうたいたい。

和田中の校長は、学校単位で地域を巻き込み、縦・横・斜めの人間関係をつくる活動をして

いる。子どもは人間関係の中でもまれて育ち、子どもが育つと必ず親も育つので非常にいい活動。他の小中学校も学校単位で何か進めたらいいのではないか。

青少年委員が、あまり機能しているように思えないので、機能できるように位置づけ又は定義づけられるといいのではないか。

今、全体として「おやじの会」がへたってきている。現役の親父たちが元気になれば地域も元気になるので育てていきたい。

和田中では農業実習を行っている。子どもたちも一生懸命やるが、受け入れた農家が活性化するので、そういう相互作用が地域の中で、学校単位で何かできたらいい。

今の子どもは、人間関係の中でもまれることがなく無菌状態の中で育っているが、何も生まれず、雑菌も何もないところでは健全には育たず、精神的にタフな子どもはあまりいない。ある大学の新生の50%が「自分は傷つきやすい人間だ」という認識を持っている。人間関係がうまく作れていないからである。

「地域ぐるみで教育立区」の中では、小・中学校が核になった展開ができればすばらしい。

委員

基本条例等をつくるときに、子どもたちの声を十分に受けとめていきたい。

「ウエストサイズ物語」を通して親子関係がすごくよくなったように、チャンスを幾つも投げかけて、区民が拾ってみようと思うことができたらいい。

平成6年の文部省通知「児童の権利に関する条約について」には、今の子どもたちの教育には、いじめ、校内暴力、不登校などいろいろ問題があるが、一人ひとりが人間として尊重されなければならないことを広く国民の理解が深められるようにと書いてあったが、そのとおりである。

委員

高円寺は、阿波踊りにより地縁、人の縁がよくでき上がっているまちであるが、「地域ぐるみで教育立区」という中で、地縁、人の縁が子どもたちにいい影響を与えるにはどうしたらいいのか。

青少年委員は、それぞれの地域と学校とのパイプ役。学校により、ほかに学校教育コーディネーターや学校サポーターなどの活動もあるので、活動の範囲に差があり一概に言えないが必要。

教育基本条例等に、何を重点的に盛り込んでいくのか？

「教育基本条例等に、何を重点的に盛り込んでいくのか？」ということについて議論していただく参考に、これまでの主な意見等を項目別にまとめました。

○杉並らしい教育のあり方とは（教育からみた杉並らしさ）

- ・教育基本条例等は、杉並区にこだわったものがつくれるといい。
- ・杉並らしい教育とは何なのか？ 将来的にはどうか？
- ・区の基本計画→「人が育ち 人が生きる杉並区をめざして」「地域ぐるみで教育立区」
- ・教育基本条例等は、教育の「地域分権」を推進していくよりどころ。
- ・「地域分権」とは、「地方分権」とは異なる杉並的な個性。
- ・「区立学校から地域立学校へ」→杉並が重点的に進めている杉並らしい施策。
- ・杉並の地域づくりやまちづくりと一体になりながら進めていくことで、杉並らしい特徴が出てくる。 そういう中で、杉並を愛する心がはぐくまれていく。
- ・杉並という地域と学校との関係、学校外教育という部分で杉並らしい特徴を出し、それを学校教育にも反映させる。
- ・杉並の人づくりは杉並の個性、地域特性が出るが、基本的な考え方は普遍的なものであり、整理して考える必要がある。

○「人づくり」が杉並区の1つの大きなポイント。キーワード

- ・教育の一番大事な基本は、人づくり。
- ・未来を拓く人を育てる。
- ・次の世代、今の子ども達に何を残すか。
- ・人づくりは心育て。家庭から出たときは、人と人との関わりで心は育っていく。
- ・杉並の子どもが立派な大人になり、杉並区、ひいては東京都、日本を背負っていけるようにつなげていく。
- ・これからの子どもたちの教育を考えたときに、今まではそれほど必要ではなかったが本当はあった方がよいもの、あるいは作った方がよいものも考えなければならない。

○地域ぐるみで教育立区 ～杉並の地域の教育力をどう高めていくのか～

- ・学校、家庭、地域の中で、一番落ちている地域の教育力。
- ・地域で子ども達がいろいろな人と関わる機会が減り、子どもが地域の中で育たなくなった。
- ・子育てについて相談する人や場が減っており、親が悩みをかかえている。
- ・もともと教育は大人から子どもに伝えていく世代間の継承であり、生活や労働の中に溶

け込んでいた。学校の登場により生活と労働が分離し、通勤が始まると、地域は寝に帰る所で生活する所ではない人や、そこに働きに行っているが住んでいるわけではないという人が増えてきた。そういう中で、教育が殊さら何かをしなくてはという話になるのは、学校が社会的上昇をしていく1つのツールとして成立しているからである。

今の社会の状況では、地縁、血縁といった形で教育を行っていないことを前提にした上で、やはり地縁で行うのだというように無理をするのも1つの方略。

- ・教育に支援を惜しまない地域社会の実現を目指す。
 - ・地域ぐるみで教育の問題を考えていく。連携、協働。
 - ・家庭と地域とのつながりをもっと大事にしていく必要がある。
 - ・すべての軸は「地域ぐるみで進めるために」に据えておかないと、議論が拡散する。
 - ・自分が育つということを区民全体、区全体で保障し支援し、一緒に楽しめる。
-
- ・ いろいろな人たちが助け合い、協力し合いながら、杉並で暮らすこと、生きていくこと、縁があって杉並に関わって良かったと思えるようになってほしい。ワンランク上の教育や学習、生活ができる居心地のいいまちとなるよう、知恵を出し合いたい。
-
- ・コミュニティを考える場合、地縁的なつながりとは別に、NPO等、テーマで集まっている区民以外の人たちも関わりを持っているので、区民以外の人も取り込んでいく必要がある。

○地域の人たちを教育支援にどうやって巻き込んでいくのか

・ 区民意向調査で、「現在、地域で、教育を支援する活動に参加しているか?」という問いに、9割以上の大人が参加していないと。参加していない9割をどうやって底上げし地域ぐるみで子どもたちを育てるか、啓発を図っていくかが大きな課題。

→10%を引き上げ20%、30%を目標にしたとすると、やる気になってもらうには?

・ また、「今後参加してみたいと思うか」という問いに対し、「特にない」が57%もある。

あまり関心を持たない大人をどのように、子どもを育てるために発奮させるか、支援に参加する人になってくれるかということを発信できたらと思う。

・ いろんな区民が参画する仕組みづくり

・ 杉並に住んで、活動、仕事をしている人がベースだが、住んでいるが仕事場は区外、住んでいないが杉並で仕事・活動をしているなど、何らかの形で杉並に関わっている人たちが、教育を中心として充実した時間が持てるよう整備が必要。

・ 定年退職等で地域に戻ってきた人たちが、子どもに関わる活動をやることで、生きがいもてることもあるのでは。そういういろいろな像を思い描いてつくっていくべきではないか?

・ PTAに関わる前は、地域活動に参加していない90%の一人だったが、関わってみると勉強になることもたくさんあり、皆と知り合いになれる。きっかけづくりで90%を減らしているのではないか。

・PTA活動も90%の人たちが傍観者で、10%の人たちで賄っているのが現状。地域も学校も同じ。少子化で、共働きの家庭も多く、PTA活動を行うのは大変だが、会社や社会が地域貢献活動に目を向け、参加できるような環境を整えることも必要。条例化に際し、地域貢献活動にどんどん人が関わられるような仕組みを作っていければと思っている。

・何か活動するときに責任など重いものを伴う場合、重いだけでは長続きしない。その中に楽しさや、役に立つ喜びがあるという仕掛けをつくることが大事。
・役に立って喜ぶ人や、やってみたら喜んでくれる人は多いので、引き込んでいくチャンスをつくることと、出てきた人たちに継続してやってもらうための手だてが必要。
・お祭り、踊りなどは、昔は労働とつながっていたが、今は面白いからやっている。よくわからないがおもしろいという感じの仕掛けもあり得る。

・地域活動ではキーパーソンが必要。キーパーソンをどうやって見つけ、育てるかが必須条件。キーパーソンの必要性も条例の中に入りたい。
・中学生が何かの形で地域の活動に参加するような場がたくさんあると、小学生を巻き込み、やがて幼稚園、保育園の子どももそういう仲間に入れていける。

・地縁は重要だが、マイナス面もある。地縁で固まっている地域に新しく来た人は入りにくいので、今後オープンにしていけないといけな
・地縁の中にNPOなどが入ることによりうまくいくこともあるが、入ることにより既存の組織とあつれきが起きることもあり、どのような形で解決するのが大きな問題。

・個人と同時に、会社や店、組織も、杉並区の中で行われる様々な活動に主体的に関わって、そこから何らかの充実感が得られるといいが、レベルの高いことを目指すので、初めは、義務化されてやることになるが、継続、充実していくためには、皆がやってよかったと感じられることが大切。
・チャンスを幾つも投げかけて、区民が拾ってみようと思うことができればいい。
・和田中は、学校単位で地域を巻き込み、縦・横・斜めの人間関係をつくる活動をしている。子どもは人間関係の中でもまれて育ち、子どもが育つと必ず親も育つので非常にいい活動。他の小中学校も学校単位で何か進めたらいいのではないか。
・和田中では農業実習を行っている。子どもたちも一生懸命だが、受け入れた農家が活性化するので、そういう相互作用が地域の中で、学校単位で何かできたらいい。

○住民自治の視点

・「自分たちで自分たちのまちをつくる人々の力を育成」
・自らの地域のことは、まず自らが考えるという真の住民自治を築くために、一人ひとりが自主的、自立的に考えて行動していく。
・今住んでいる杉並区を自分たちの心の育つ土壌、基盤、環境にするために、愛郷心を育てていくことが大切。

○家庭教育

- ・家庭のしつけとは、基本的なこと、良いことと悪いことを教えること。
- ・家庭での教育、しつけができていないと、集団に入っても協調性がなく友達とぶつかる。
- ・昔はしつけを家庭でやっていた。今はしつけも学校でするような雰囲気だが、考え直すべき。
- ・親が子どもを見なければいけない。学校や幼稚園にお任せではいけない。
- ・自分の子どものことしか考えない保護者が多くなり、お互いさまということが減っている。
- ・子どもが最初に参加する社会は家庭。そこでいろいろな体験することで、子どもの心は育つ。
- ・自分だけで悩んでいる親も多いのではないか。
- ・今の子は、親が先回りするから家庭生活の基本的な体験ができていない。
- ・「自分の子どもが好きか、子どもはあなたを好きか」と自信を持って言える家庭か。
- ・基本条例では、子どもだけではなく、保護者に対していろいろな指導ができるようにしたい。

○就学前教育

- ・人の一生の一番大事な基礎となる部分(根っこ)を育てることや、低下している家庭の教育力を支援していくことが、幼児教育の大きな役割。
- ・幼児教育の果たす役割が、安全や基本的な生活習慣の習得になってきている。
- ・子どもは日々変わるもので、教育は長い目で見る必要がある。
- ・目に見えないところ(生まれてきてよかった、生きてきてよかった、愛されている、うれしい、幸せ)を大事にし、しっかり感じられる子育て、子育てをさせたい。

○学校教育

- ・現場の教員の資質、能力を高めていく必要がある。
- ・「よくわかる授業」と言う先生がいるが、それは一面に過ぎず、むしろわからないことがわかるということが大事。
- ・子どもの基礎学力の低下、学力向上が課題という議論があるが、一方で学力の剥落、はげ落ちという問題も重要。
- ・子どもたちが今学んでいることを、実は大人たちはあまり使っていない。

○社会教育(生涯学習)

- ・子どもだけでなく、大人の教育、社会教育まで含めて考えるべき。
- ・教育を、幼児から高齢者まで、広く世代間で捉える。
- ・大人の教育、あり方としては、学習、教育を経験することが目的なので、何かのための教育ではなく、それ自身がおもしろい、楽しいということをどう含めていくかが課題。

○その他

- ・平成13年に「杉並の教育を考える懇談会提言書」が出されているが、この中でかなりのものが提言されており、これ以外に課題として取り上げるものはあまりない。
- ・金があれば何でもできるという風潮をやめていかなければならない。

形式について（条例とするのか、憲章か、宣言か）

→ 条例にするかどうかは、もう少し中身の議論を経て、形が見えてきてから検討する。

- ・「憲章」とか「条例」といった問題に議論が集中すると、具体的な内容に入っていけない。
- ・「条例」と「憲章」では趣きが違って来るが、教育基本条例は、通常の条例とは違い、罰則規定があるようなものではないと思うので、「憲章」に比較的近い形になる。
- ・区民の皆が「自分たちが何とかしなくてはならない」と立ち上げられるようなボトムアップが良いが、条例だとそれはできにくいので、憲章みたいなものになる。
- ・「条例」か、「憲章」かで議論の方向が違って来る。
- ・「条例」は、ある程度のミッションがあり、それを実現していく方向で具体化を図るために議論し、それをもとに施策の方向づけをしていくのが話の中心となる。
- ・「憲章」、「宣言」は、杉並の教育をどう考えていくのかを最大公約数的に出し合い、ある程度の問題認識、将来像が合意形成されるまでが着地点。そこから先はそれぞれの部門なりパートで議論が巻き起こるように仕掛けていくことだ。

- ・「理念」から入って「行動目標」まで検討し、大人が子どもたちのためにどういう支援ができるのか、1人ひとりの区民、学校、家庭が、というところを検討する。